

土 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日）
昭和二十三年四月二十八日印刷
昭和二十三年八月一日発行

第二十四卷

第八號



八月号



浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額四八〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利

用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

浄土八月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

カット

加藤金一・原比呂美

鑽仰法然上人

林 隆碩 (2)

—— 隠遁の蹤跡 ——

庶民と念仏

一瀬直行 (12)

中国綺談

牧尾良海 (16)

東と西の間から

松濤弘道 (6)

茶心と仏心

山本恭雄 (11)

近代高僧伝

大橋後雄 (20)

寒蟬に送られて

鈴木成元 (22)

実話死の儀礼

(31)

法然上人の言葉

増谷文雄 (26)

書評

扉の御法語 (18)

吉祥天

水を活かす (34)

せつちゃんと
とんちゃん

会員紹介 (40)

小説素はだの人……………鶴田湛泉 (36)

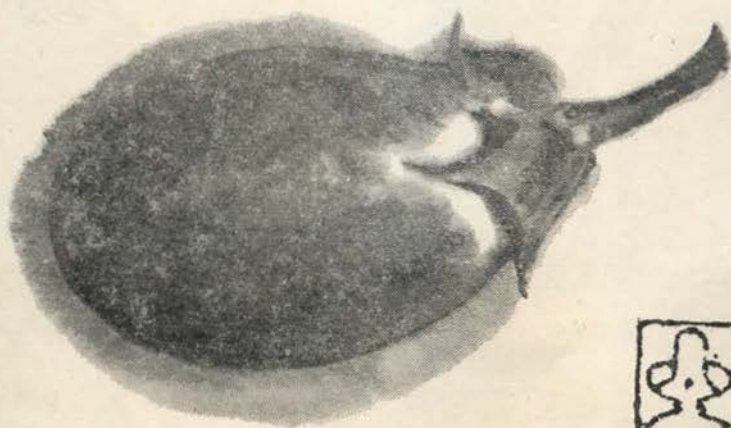
—— 千葉胤頼 ——

浄土

八月号

それ十重^{じゅうじゆう}をたちて十念をと
なへ、四十八輕^{しじゅうはちけい}をまもりて、四
十八願をたのむは、心にふかく
こひねがふところ也。

法然上人御法語



鑽仰法然上人

隱遁の蹤跡

——玄寶僧都——

林 隆 碩



西行法師が

世の中をすてゝすてえぬ心地して

都離れぬ 我が身なりけり。

と歌っている。これは文学的には、すてゝすてえぬ辺に興
趣あらんも、信仰的には煮え切らない不徹底なものがある
我祖の隱遁は、その終生を一貫して真徹なものである。此
の隱遁の由つて來たる歴史的、思想的背景は実に遠くかつ
深きものがある。古來より隱遁の聖者として南都を代表し
て玄寶僧都があり、北嶺を代表して、空也、増賀の二聖が
ある。これは記主禪師の決疑鈔の御意を基としてかくは結
論したものです。三聖と我祖との思想的交渉は表面的には
毫もしるされてはないが、消極的には關係を説明し得るの
である。即隱遁の大聖たる我祖と隱遁の代表者と全々没交
渉であるとは、云何にしても考え得ざることであるからで

ある。故に三聖の尊状を略述して、依つて以つて我祖の隱
遁の由來を付慶して九牛の一毛的であつてもよいから、こ
れにあやかり度いとおもう。即ち懷佩在身のためである。
一体、かくの如き聖者を産むに至つた社会的原因を尋ぬ
るに、大體、三個の理由がある。

(一) 當時の貴族達が、多産の兒女を充分に養育するの資糧
がない。よつてこれを寺院に送りて、己れが生活力を保
持した爲めである。

(二) 當時の社会は、京都の公家閥ならでは立身出世が不可
能であつた。閥外の人で、功名心に燃ゆる人人は、立身
の道を、僧侶階級に求めて翕然出家するに至つた。

(三) 一部浮浪の群、即ちルンペンが衣食の安全を計るため
に、身を寺院へ寄せたこと、而して數の上に於いてはこ
れが大勢であつたのである。衣食のために、禿首となり
法衣を纏うものが大多數であつた。奈良仏教に於いて此

の傾向が強いのであるが平安仏教に特に濃厚である。此

の勢の趣くところ、餌取法師（主として鳥類を取る生活）皮法師（主として獣類を取る生活）の名さえ見るに至った。以て一般法師の価値を知るべきである。ある人は僧と法師を区別して、僧は真実の出家、法師は非僧非俗の行乞者であるとの面白い視方をする学者もある。

この見方を真なりとしても法師の下視は延いて僧の下視ともなるので、僧も割引して卑賤視さるゝ傾向であつた。

此故に真面目に仏道に志し、宗教的信仰を探索するものには、さらに出家の出家を熱望するようになった。これ即ち遁世である。別言すれば、我々のこゝろを人生の内面と、秘奥に振り向けざるをえざるものが、これが、いんととなつてあらはれたのであります。

玄寶僧都

玄寶は河内の人（法兄は賢環で、平安城を造るために、大納言藤原の小黒磨呂等と共に都遷の地を相した高僧である）興福寺の学徒で秀才であつた。寶について二つの挿話がある。

（一）は興福寺の交を好まずに三輪川の辺に、わずかの草庵を結んで隠居した。

三輪川の清き流れにすゝきてし

衣の袖をまたやけがさん

その後、只一人、跡を晦らまし了る。弟子眷属、多く尋ぬといへども、行く方をしらず、南都のみならず、天下の貴賤これを惜みなげく。年序を送るの後、門弟一人、事の縁あつて、北陸道を下向するの間、ある渡に船わたしに乗るの間。渡守を見れば、首をつかみ、もと云ふ程に、老ひたる法師の布衣一つ着たる怪しげのものさまと見る間に、さすが、又見馴れたる心地す。顔色も、普通の人に似ず、誰かは似たるべしと思ひ廻らして見れば行方しれずして失せにし、我師の僧都に見なしつ、心あさましく僻見かなと見れば、惣てたがわず、目もくれ、涙のおつるをおさゑて、人目を憚るの間、彼も知り気色に見ながら、ことさらに、顔色を合はせず、寄りて取りもつかばや思ひけれど、人しげさに、なかなか、上道のころに、此の辺に宿りて、夜陰などに、おはすらん所へも尋ね向ひ、しづかに申し承はらんと思ひてすき了る。

上洛の時、此の渡に着き、先の渡守を見るの所、他の人なり。おどろきかなしんで、子細を相尋ねば、さる法師侍りき、年来この渡守りをつとめ侍りしが、如何なることか侍りけん。去るころ、逐電して行方しれざるなり。然る如き下腐と申しながら、船賃なども取らず。唯た時の口分

計りを取りて、昼夜不斷に念仏をのみ申し侍りしかは、この里人も、あはれみ侍りしに、失せ侍れば、人ごとに惜み忍び侍なり。きくに、哀にかなしきこと限なし。失せたる月日を聞くに、我が見合たりしころなり。有様を見得ぬとて、去り隠れられにけるなるべし云云。

(二) 伊賀国の郡司之許に、いやしき流浪法師一人出て来りて仕かへられけり。草刈飼馬に両三年を経るあいだ、郡司不慮に、国勘を蒙りて国中を追却せらる。縁者、境界に集りて訪ひて、悲歎比類なし。相伝の所頌、所従も其の数あり。忽ち打ちすてゝ、人の国に赴くこと、実に疎あるべからず。妻子眷属、悲哀涕泣、ここに、この草刈法師、事の子細を問ふと雖も、人数ならざるによつて、返答の人なし。まげて懇切に不審をなすあいだ、ある下女一人、なまじびに、このことの子細を語る。諸君聞き了つて、法師云ふ。おのれ等が計らいに及はずと雖も、只今、御出立に及ふべからざるか、叶はすまでも、先に御上京あつて、何度も申す子細を陳べられ、其の後、叶はざる時こそ候はめ、国司の御辺には、おろおろ事の縁侍り、申し試むべし云云と。郡司、此事憑むとはなけれども、心の置き所なきに依つて、法師を相具して忽ち上京、此時この国は、大納言と申しける人の領にこそありける。忤の辺ちかくなり

て、法師いふ。人を尋んと思に此の姿にては怪しからぬべし。袈裟一つ借り出さるべきかと。即ち借りて着せたりければ、大納言の御許へ歩み入るの間、侍所に居並ひたる輩、暫く怪しきに思ひて、能く見知るの後、皆、庭上に下り跪く。郡司は門外に留りて、あさましと見居る。亭主、此の由を聞き、滴瀝として、請し入れて対面す。先年来、何所に、何様に、御座有りけるや。公より始め奉て、惜みたてまつらざる人なし。など示めざるの間、かくの如きことは、今しづかに申さしむべし。先に申すべきことありて、参入するところなり。伊賀の国に年来たのみ侍りつる郡司某、国勘によつて、国内を追はるゝの間、悲歎の至極、不便なり。又しいて罪科にあらざるものなり。此の法師に恩免候か云云。垂相いふ。凡そ左右に及はず、左様に御座候へければ、謬りて思し知るべきの者にこそ侍るなれとて、やがて、免せらるの上、国恩を添ひ給ふの由、庁宣をなして奉り了んぬ。先づこれを見せしめて、悦はせ候はんとて、白地氣にて、立ち出でられて、郡司を相具して、近辺の小屋にて、袈裟等を脱きたゝみて、其の上に、庁宣を置きて、しきを出へる跡にて跡を暗らます云云。亦も玄賓のしはきにて侍りける。

これにて風格、道骨を知るに足りず。晩年には備中

國、湯川寺に住じて、年八十にして逝くと伝う。

嵯峨天皇景仰甚だ深く、時々文、詩を給う。

弘仁二年五月十六日 賜_ニ玄寶法師_一書曰、

真俗殊_レ趣 礼接自疎 渴_ニ仰_ニ微音_一 不_レ捨_ニ少辺_一

属_ニ夏景燦条 炎風扇_レ物 想 禪場被

服 与_レ時宜_レ改 卿附_ニ法服一具_一 宜領之

真俗をもむきを殊にす、礼接をのづからうとし、微音_{（よきほしめ）}を渴

仰す、しばらくもすてす、夏景条_{（なかげじょう）}をとらかし、炎風物をあ

おぐに属す。想うに禪場の被服、時とともによろしく改む

べし、聊か法服一具を附す、宜しくこれを領せよ。

哭_ニ玄寶和尚_一

大土古来無_ニ住著_一

随_レ緑化驂_レ厭_レ塵人

松掩_ニ旧扉_一 猶鬱茂_レ

生前_レ蘿席空留_レ月

禪林時見擢_ニ杖幹_一

鑄素共愁面礼罷_レ

大土古来住著なし、名山に跡ををくらまして風霜に老ゆ、

縁に随う化休塵を厭うこと久し、正に帰するの真機忽ち滅

亡す、松は旧扉を掩うてなお鬱茂し、草は新塔を暗くして

漸く荒涼、生前の蘿席空しく月を留む、没後の金爐誰かが

香を添えん、禪林時に見る杖幹のくだくるを、梵宇壊けて

棟梁を失う、鑄素共に愁いて面礼やめ、遙々仰き拝して西

方に向ふ、興福寺には寶の木像を安置して逆跡を敬慕して

いるのであります。

信

仏法の海に入るには、信を根本となし、生死の河を渡るは、戒を船筏をなす。（心地觀經）

信は道の元、功德の母なり。一切諸の善法を増長し、一切諸の疑惑を除滅し、無上道を示現し開發す。

（華嚴經）

尊貴なりといえども、然も道を信ぜざるものは、たとえば狂花の落ちて、実を成さざるが如し。

（中本起經）

信は能く一切の仏を示現せしむ。

（華嚴經）

信はこれ仏の子なり、この故に智者はまさに常に信に親しみ近づくべし。

（宝積經）

東と西の間から

—日本のすすむべき道—



松 濤 弘 道

はたして、私に、日本の事やら西洋の事や

らを書くだけの、広い経験と見識があるのかどうか、大いに疑問に思っているのですが、そうかと云って、黙っては何もなりません

ので、外から見たまま、感じたままの、日本及び日本人を極く大雑把に、かい摘んで御披露したいと思っております。

まだ滞米三年あまりで、他の諸先輩の方々に比べて、海外生活の期間も極く短かく、世界の裏街道を素通りして行けるだけの度胸は

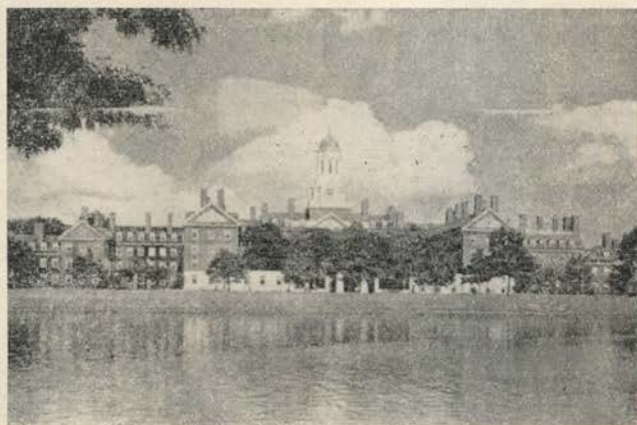
持ち合わせませんが、つくづくこちらに居て感じます事は、日本人旅行者の異様な存在です。

今年の文芸春秋の正月号でしたか、岩立一郎と云う、共同通信の外信部長をやっておられる方が「シスター・ボーイの国日本」と題して、海外に於ける日本人旅行者の実態を、うまく画き出していました。羽田空港や横浜港を、元氣よく、旗幟りで送り出された日本人も、一步外国の地を踏むや否や、シボンだ風船玉みたいに、ガラシがないと云うのです。こちらでは、いくら威張ってみても、肩

書を振り廻してみても、誰も相手にはしてくれず、言葉も通ぜず、見知らぬ世界にあって、孤独感と劣等感に襲われて、ホテルと観光バスを往復する以外に、為す事もなく、あわただしく、高価な旅費を使って、有名所をかけ廻り、再び、なつかしの日本の地を踏むや否や（そう云う人に限って）俄然空元氣を出して、意氣揚々と「只今戻りました」とか何とか云って、出迎えの人達を圧倒させ、海外視察談とか云って演説をしたり、本を書いたりして、聴者、読者を感心させると云うのです。

はたして、以上の事柄が事実かどうか、個々の海外旅行者の行き帰りを、隈無く調べた訳ではありませんから、何とも云えませんが、その様な詮索は、物好きなジャーナリストにおまかせするとして、只、云いたい事は、確かに、日本人旅行者には、国際的感覚を持ち合せる人が少ないと云う事です。これは、何も海外旅行者に限らず、日本人一般に云える事だと思うのですが、まだまだ、日本は鎖國の域を脱していない様に感じられるの

です。海外に出るともなれば、あこがれを彼地に持って、早くからそわそわし、皆が大騒ぎをして送迎するのも、人情として非常に微笑しい事ですが、それら自体が少し大袈裟すぎますし、西洋礼讃が強すぎやしないかと思うのです。その行先の西洋も、ヨーロッパの避地や、デキサスの片田舎へ行くと云ったのでは、特別の魅力も湧きませんが、花のバリーカンドンか、或はニューヨークあたりでも行くとなれば、まるで、これから文明と云う名の湯を浴びに行く未開人の様なしやぎ様で、行く本人も、それを取巻く人達も、急に文明人になった様な錯覚にとらわれやしまいかと恐れるのです。奈良、平安朝時代の、遣唐遣隋使ならいざ知らず、今では、航空路が網の目の様に網羅されて、世界の隅々まで、わずか一日、二日と云う時間を争う中で、悠長な歓送迎に半日、一日をつぶすのは、誰にとっても時間の浪費の様な気がしてなりません。特に、そうして送り出した人にして、外国の何物かを(非常に漠然とした言葉ですが)掴んで帰る人が少ないとしましたら、折角、



(ハーバート大学)

旅行者から海外の新しい文明の恩沢に浴そうと、待構えていた人は裏切られる事になりまし、何か代替物を掴まされても、その中には、海外に長く住んでいる日本人からの又聞き知識であったり、有りふれた新聞、雑誌

その他案内書の職訳であったりしますから、あまりあてにはなりません。この大学の教授の中では、二、三日間ヨーロッパに講演旅行に出かけ、それも行く当日、飛行機の出発の約一時間前まで、研究室で学生と共に実験に携わっていて、そのまま、車で飛行場に駆込むといった人が居り、帰った当日でも、そのまま、飛行場から学校に車を走らせて、講義に間に合わせるという人も居る位ですから、時間の觀念が、普通の日本人旅行者と二桁位違う様な気がします。

万事が悠長(?)な日本からめまぐるしい米國に参りますと、なかなか歩調が合わせにくい事は事実で、ゆっくりくつろぐところもありませんから、常に何かしていないければならず、慣れて、そのテンポに乗ってしまえば、何でもありませんが、短期間の旅行者にとっては、それがなかなか出来にくい事と思います。

言葉の点について、日本人は、一般に語学の才能が無いと日本に居た時よく聞かされていましたが、案の定、こちらに来てみ

て成程と合点致しました。

旅行者は云うに及ばず、視察代議士、留學生、長期滞在者であっても、どれ程日本人で英語らしい英語を書き、且、話す人が居られるか疑問に思っています。ために海外から日本へ帰られた人達の英語をお聞きになられるのが一番だと思いますが、少しバタ〜くさい英語だからウマイと感心するには及びません。精々、原稿無しで三十分も立て続けに、英語が話せましたら、それがたとえ間違いだらけの訥弁でも及第です。

さもなければいくら滞在年数が長く、各地を広く見て廻ったとしても、その人の旅行談は、通り一遍の観光案内的旅行談の何物でもありません。どこの景色が良かったとか、食事がうまかったとか、設備がどうだったとか云う、有名無名の海外旅行者のお上りさんの外国礼讃は、もう此の辺でやめて戴きたいと云うのが、こちらに居る日本人のいつわらぬ気持です。

それ等を誇って、日本の内地人に紹介したところで、何のたしにもならず、かえって行

く事の出来ぬ、取残された方々をうらやましがらせたり、ひがませたりするのがオチで、旅行者本人の自己満足振りが目にみえる様です。それよりも、各土地土地の人々と、じかの交際を通じて、彼等の悩みや喜びを分か合ひ、また、風俗習慣、文物の相違から立入って、それ等の人々の心構え、態度の相違や、文化の表現形式の相違を理解する事は、どれ程、日本及び日本人の在り方を見究めるのに、役立つ事でしょうか。此の様な有益な反省の資料を、海外で集めてこられた方々に絶大な敬意を表したいと思ひます。

それには、何としても、その土地の言葉を知る必要がある訳ですが、まだまだ日本人の語学力は一般に貧弱である事は事実のようです。植民地の国民は、外国語に堪能だとは良く云われる事ですが、幸か、不幸か、日本はささやかながらも独立国を維持して来ているからなのでしょう。駐留軍や外国人と接触される方を除いては、あまりかんばしいものとは申されないようです。私達は、何年日本で主に英語を学ばせられたかわかりません

が、どこか日本の語学教育には、根本的な欠陥がある様な気が致します。他の人は良く知りませんが、米国にあって自由自在に英語で自分の意志を表現される日本人と云えば、仏教学者である鈴木大拙先生と、国連代表の松平大使位なものではないでしょうか。首相随員の松本達蔵代議士もなかなかうまいと聞いています。

私達が国際的視野に立った日本人になるには、どうしても、英独仏中の四カ国語は読み、書き、話す事が出来るようになるのが、先決であると思ひます。こちらでは、英語を除いて、独仏の二カ国語は外国語のうちに入らなくなりつつあります。まだまだ、これ等四カ国語を読み書きするのに、原語と云う觀念が抜け切れぬ様では、国際的日本人になつたとは申せません。

日本語はいわば家庭語で、英独仏中国語は社会語です。社会の一員になるには、社会語を自由にあやつれなくては問題にならず、その点、家庭語しか持たぬ日本人は、未だ外国の社会からお客さん扱いにされています。お

客さんのうちは、下手な外国語でも愛嬌があって、なかなか微笑ましいものですが、一個の独立した成員として、社会の仲間入りをするには、子供じみた言葉ではとんだ赤恥をかくことになります。

個人的なことで恐れ入りますが、何とか日本の語学の弊を取除くには、まず自分から始めようと決心して、外聞を忘れてハイスクールから学び直して、未だ大学に居りますが、まだまだ日本人の英語が抜け切れず悩んでいます。

しかし、慣れるという事は良いもので、語学の才能が有りませんでも、白人の社会に、一人で居りますと、否応なしに英語で物を考える事を余儀なくされ、上達こそしませんが、理解に左程困難ではなくなりつつあります。幸い、ハイスクール時代から、あまり成績の良くない白人のクラスに入っていた関係で、妙な自信がついて来た様な気が致します。

ただ、ここで考えねばなりませんことは、日本人には一般に悪い癖があるようで、少し

他人が勝れていますと、変な卑屈感に鎮まれ、亦、自分が少しでも勝っていると、優越感を抱いて何をするかわからないといった、極端な性癖があるように見受けられます。白人優性の先見的習性は、東洋人としてなかなか抜け切れないことでしょうが、白人、黒人の別なくお互いに、打ち融けて話してみれば、風俗習慣の相違を除いて、そう変ったところとてなく、結局は、本人の教養と知性如何に価値判断の基準があるようです。

ところが日本に居る間は、外国を実際知らないところから、妙に羨望視して、頼みもしないのに自ら壁を作って、外国を礼讃してみたり、また、一度海外に出られた方は、その表面のみを観察して、幻滅を感じて、帰国早々日本優越論を唱えてみたり、やはり極端から極端に走っています。これ等も、畢竟、自分というもののおき所がわからず、日本とはどう云う国か、或は日本人は如何なる国民であるかという、正しい評価がなされてなく、日本文化に対する、公平な認識がなされていないような気が致します。

或る著名な英国の教育者は、生徒に国際的感覚を植付ける為、各人に地球儀を与え、毎日それを見詰めながら勉強させているそうですが、日本の若い人達にも、この位の配慮があつてしかるべきではないでしょうか。

近頃、慨歎に耐えないことは、米國にこられる留学生の多くが、日本文化に対して無智にも等しい悲観論を唱え、やたら、行きづまりつつある西洋文明を礼讃し、追従している事です。こちらに來られる位の方は、英語に堪能で、そういう人に限って、日本の文物はすべて古くて、無価値なものと、簡単に割切ってしまうと、西洋に新らしさを求めて來られるようですが、これではいくらたっても、西洋追従はまぬかれず、その上に立って、一緒に世界文化の進歩に貢献する事は出来ません。

西洋の文物は、日本人にとって目新しいものには違ひありませんが、それ等が、全て立派なものと判断するところに、誤りがあるようです。

無論、西洋のつまらぬ機械文明の裏には、

それを支える偉大な精神文化がある事は事実で、驚歎に値する点も大いにありますが、そうかと云って、日本の精神文化遺産を、全て古くて封建的なものとときめつけて、ソッポを向いたところに日本のインテリの自己矛盾の悲劇が蔵されている様な気が致します。日本では、未だに自称インテリが西洋礼讃にうつつをぬかしているかたわら（今では大いに改善されたと思いますが）一方、情趣豊かな日本を知る海外の日本人及び良識ある西洋人は、万事機械化され、合理化された不自由な西洋に、嫌気をさして、次第に日本文化の良さに目醒めつつあるのが現状のようです。ただ一つ恐れる事は、これが、単なる懐古趣味や、エキゾチシズムの自己陶醉や、復古調的愛国主義に墮する事です。

そうではなくて、今迄は、一方交通のように、西洋から文物を導入して、日本の近代化をはかった、この事実はやむを得ないにしても、その行きすぎを是正し、日本文化の再評

価と再認識をする時期が、来ているのではないかという気がするので。それにはまず、自国の文化の在り方を良く知ると同時に、外来の文化に対して、徹底的な批判をすることが先決で、その具体的方法としては、日本人は全て、自国の文化の根底をなす、仏教思想の何たるかを、近代方法論によってとらえ、且つ、海外に出なくとも、英独仏中国語を通じて、西洋、東洋の文物の何たるかを、間接的（書籍等を通じて）に知り得るならば、ここに東洋でもない、西洋でもない、新しい日本に行くべき独自の方向が、自ら定まってくるのではないかという気がしてならないのです。

では日本の皆さんお元気で

（ハーバート大学図書館にて）

×

×

×

×

「ハワイ通信」でおなじみの松濤氏が、昨年九月、米国のハーバート大学の大学院に入学され、今回、アメリカ通信を寄せられました。松濤氏は大正大学の宗教学科を昭和三十一年に卒業して、直ちに、ハワイの浄土ミッシェンに赴任し、かたわら、キングスリー・カレッジに学び、勉学と布教とに従事されていましたが、その努力の甲斐あって、めでたく、ハーバートへ入学されました。

日本人としてハーバート大学の正規の課程を終えた人は数少ないとのことです。宗門のため同慶に耐えぬと同時に、折角苦心して道づけられた松濤氏の跡を絶やさぬよう、続々、宗門の若い人々がつづくことを希望します。

かつて、わが宗は多くの人々を海外におくり、仏教界に学問の金字塔を打ち建てた歴史を持つております。現在、インドに春日井氏、ドイツに田丸氏を送っておりますが、併せて異境にあって研鑽に努力されているこれ等の方々の多幸を祈る次第であります。

茶心と仏心



山本恭雄

緑山(増上寺)で日比師について茶味愛
樂の案内を貰いてより、今もその余情を感
じている。

一服の茶を喫するにしても茶心の有無は
その茶命——大げさだが——の生死がかか
っているようである。

眼に一片の墨跡、鼻に香を聞き、松溝を
耳にして舌に茶を味い乍ら身心共に茶境に
入ることこそ、その味が生きてくるので
ある。

一本の茶杓を眺めるにしても趣のまま
に、めどる心は作者の心情と茶境に接し、
尽きることの知らぬ境に入るものでしょ
う。

単に竹の一片として扱
かわれるならば、路傍の
竹片に等しいものがある
のです。これこそ茶心の
あるなしにあるのです。
私共が仏の尊像を眺め
拝す心も仏心のあるなし
では一刀三尊の仏師の魂に近づくことは出
来ないでしょう。

今の人達はあまりにもプラスチック
ンの世の中に馴らされて、茶心も仏心も薄
らいでいます。

鼻にジャスミンの香を、目にテレビを、
耳にロカビリーを、口に茶なりコーヒーな
りでは茶心の湧くはずはありません。

茶会の帰途ゆきづりの喫茶店で労をいや
すというのが、茶を嗜う若い女性達である
のですから仕方ない事かも知れません。

これというのにも単に業の行のみに専念し
ているからではないでしょうか。誠の道、
本当の茶心が忘れられているからです。

仏の教えに生きる人々の中にも仏心の忘
れられた人がいるようです。業に甘じて日
々の生活が極めて雑として悟入し得ない人
が多いのではないのでしょうか。

利休の点前は秀たる武人も斬り込む隙が
なかったのであり、法然上人の前には武將
も帰依したのです。

これはその道、その教えに通ずる心があ
るからです。仏心のない仏教徒こそ蟬がら
に等しいと思います。

心あらば一片の花も大自然の懷で眺めら
れるでしょう。

仏心も茶心も好き一日の中に養わなけれ
ば決して純一無雑な心にならぬと思いま
す。

その上一日一日の生活の中に生かさねば
ならぬと思っています。

(瑞光幼稚園長)

× × ×

庶民と念仏

—人間の心—



一 瀬 直 行

本日は異った人間の心の姿、うるわしい心の人と、すさびきった心の人との、善意のあらわれ方の相異を、これからお話ししてみたいと思います。二人とも最近私の寺で経験した話、云わば実話です。

平常寺に暮しておりますと、他の社会と違つて、人間のまことに接し、思わすうたれることがありますし、又露骨な醜さに接して、実にいやな感じをうけることがあります。嬉しいことにつけ、悲しいことにつけ、心のしん底から出た感情に出あうことが、多いと云えます。それだけにこつちと

しても、常に誠意をもって対さなければいけないと思つています。

募参をすませたあとで、

「お募まいりのあと程、すがすがしい気分はありません」と、一様にはればれとした表情で、帰つてゆきます。

今のような時世に、こうした心の喜びと感謝の念を抱くことの出来る人は、仕合わせと云えましょう。心のよごれた人には、到底味えないことかもしれません。

先祖の墓所の前に立ち、そこでは人それぞれによって色々な心の姿があらわれるこ

とでしょう。生前中のことを思い出し、ひとり残された淋しさを嘆いてゆく人もありましょう。なにか反省の気持を訴えてゆく人もおりましょう。生活の困難さや日頃の愚痴を述べてゆく人もいましょう。どうしたらよいのか、迷いにおちて、それをいともらおうと、念じてゆく人もおりましょう。思わぬ喜びをがち得て、それを報告し、感謝してゆく人もありましょう。

とも角仏前に新しい花をそなえて合掌し、敬虔な気持で帰つてゆかれます。それは残された家族のつとめでありますが、単

なる人間のつとめにとどまりません。それによって自らの心のよごれを去り、清められることになりました。

そこでは、世間でみるような狡猾なかけ引きや利己的な欲心がなから、しいて、清潔な喜びと安心を得ることが出来るのだと、云えます。

最近必ず毎朝六十前後の粗末な身なりをした人が、門前の往来に立ちどまり、本堂の方に向って、礼拝してゆきます。年恰好はもう初老というところです。いつも同じ貧しげな服装をしております。おそらく平常山谷あたりのやす宿にとまってい、これから仕事に出かけるところでしょう。仕事と云っても、若い者と一緒になって、荒い力仕事をしているようにみえます。少しも老い込んだところがなく、日にやけた顔で、しっかりした体軀をしています。が、全体



に温和な感じがあふれております。

時間にすれば、朝の六時頃です。まだ近所の人達は腹を空けていて、雨戸をあけた家は、いくらかありません。町中とは云えど、通

る人もなく、埃も立たないで、朝の冷たい空気は、すがすがしい程、新鮮で澄んでいきます。

その頃になると、判でおしたように正確に姿をあらわし、往来から本堂に向って、暫らくは頭を垂れております。早朝、静かな、清新なうちに、その人の敬虔な心のしみ渡った姿をみてみると、思わず心をうたれます。

私としても、時刻が来ると、その人の姿が消えるまでは、なんとなく気が落着きません。私のところは、戦災に残った石の門柱が立ち、扉のない儘になっているところから、あけ放しも同様で、往来から境内が、まるみえになっています。門から正面の本堂まで、敷石がしきつめてあります。なにか相手に粗相でもあって、せつかくの朝の気持をこわしてはいけないと、私は気をくばるわけです。

その人の姿をみれば、全くの孤独の境涯にあるかにみえます。ことによったら、戦争で家族をとられてしまったのかもしれない

ません。さもなければ、そんな年になって、やす宿などにひとり暮すわけもないと、思われます。この世の淋しさ、わびしさに、じつとたえて、暮している。いくら生活が貧しくとも、働く喜びを知り、つまらぬ不平不満を口にしないでいる。よくおのれをわきまえ、残り少ない余生を正しく送ろうとしている。おそらくこうした人から、過ぎ去ったことどもを、きいてみれば、幾多の生きた教訓が出て来るかと思われまふ。

だが然し、そうした勝手な臆測や穿さくは、あまりに礼を失した話で、つつしむべきことと思います。

ただ今日という一日を平和のうちに暮せますようにと、心のうちに祈っているのでしょう。或は又、わかれた肉身の冥福を、心しずかに祈っているにすぎないのかもしれない。

この六十前後の人、人間の謙虚なうろわしさを身に付けた人とは、凡そ反対側に住む人とも云える若い男が、これも最近私の

寺にたずねて来ました。

丁度午前中のことでしたが、突然若い男がやつて来、外からあらあらしくどなっています。

直ぐ私は玄関に出てみましたら、ひどく人相のけわしい、よごれた服装の二十五六の青年が、氣負いたって、乱暴な態度をしていました。どうみても、氣持のすさみきった様子をしております。

こうした人はよくたずねて来るので、又押売りか、物もらい位に思ひまして、

「なにか御用ですか？」と、たずねてみましたら、

「いいから、一緒に墓所へ案内しろ！」と、いいはっています。

私の所へは日に幾人となぐ、こうしたものもらいや押売りがたずねて来ます。彼等には、直ぐと時代が反映して、この頃のようには景氣が悪いと、自然数もふえ、氣も荒っぽくなってゆきます。

その時私は相手の青年に、

「どちらへ御参詣になりますか？」と、

出来るだけ丁寧にきいてみました。

「いいから、早く案内しろ！」と、又もあらあらしい態度で、どなっています。

私の墓所には簡単な扉が付いていて、普段はしまっています。そうしないと、あらされて始末がつきません。私は相手から云われる儘、墓所に案内してゆきました。

その男の側へよると、強い酒の香が匂って来ます。日にやけた顔には、争いをした時の傷あとが深く残っています。目のふちが赤くただれています。鋭い眼光を放っています。

こんな人をお檀家のうちにこれまで見たことも、聞いたこともありません。私には全く初めての人です。どうみても愚連隊の標本と云えましょう。

「どうせ、おれはやくざだ！ それがどうしたって、いうんだい！」

そんなふてくさったことを呟いています。そうかと思うと、

「おれはな、おやじとおふくろの墓へおまいりに来たのだ。子供のうちから家をと

び出し、さんざん親には苦勞をかけてしまった。急に親に会いたくなつて、やつて来たのだ！」

そんなことも嘘いています。

こうした人を相手にする時、いつもうまくしたことは口に出せないで、用心しています。というのも、こっちの気が相手に素直に通じることがなく、よくも悪くも言葉じりをとらえ、因縁を付けるのが常習だからです。

やがて青年は一人で墓所へ入って行き、「おれには親の墓がわかつているから、もう来なくてもいいよ」と、云い捨て、あっちこっちの石塔を眺め廻しています。それとなく私は様子をつかっています。と、

「おれが悪かった。許してくれ。すまなかった。すまなかった！」と、むせびながら叫んでいたかと思うと、突然泣き出ししました。悲しい姿というよりは、いささか奇妙な感にうたれました。

おそらく今日まで親不孝の限りをつくし

て来たことでしょう。又身をもちくずして悪事の限りをつくして来たことでしょう。けれど自分の両親が入ってもいい、どこ

の墓かもわからない墓に向つて、とめどなく涙を流してわびる姿に、私はきらりっと光る人間の善意をみてとつたのです。

日頃彼はそんなことを考えてもみなかったかもしれない。考えなくとも、彼の荒れすさんだ心の隅に、ちゃんと座をしめていたわけです。それがちよつとした機会に表面にまであらわれたにすぎません。この腹むつていた善意を大胆に告白するところに、私達の教えのまことの意味があると信じます。

それにしても人間の肩とまで云われる身になったのは、当人の心がけの悪いことはいうまでもありませんが、戦後の世の中の不安定さや冷酷さを思わないではいられません。(NHK「人生読本」放送)

(絵・加藤金一)

吉祥天

仏教に出て来る女神の中で、弁財天と並んで、美人とされる女神である。もとはインドの神話の中に出て来る。父は徳叉迦、母は鬼子母神で、幼い頃は母に似て非常に粗暴であつたが、釈尊の説法をきいて慈悲心を起し、仏道修業して成仏して、吉祥摩尼宝生如来といわれた。福德の神として、人々に財宝を与えるといわれる。

毘舍門天王の妃とされ、そのお顔はふくよかにして端正、天衣、宝冠をつけ、左手に如意珠(思うことの何でもかなう不思議な玉)を持ち、右手に施無畏の印を結び、石台の上に坐す。天女中その美貌を以って有名である。

日本では奈良朝時代には、豊年を祈り、災難消除を願つて盛んに崇拝されたが、後世になると、他に色々の福神(大黒・弁天など)が出て来たので、現在ではさのみ拝まれなくなつてしまつた。本郷に吉祥寺あり、また東京の西郊の地名吉祥寺など、歴史には残っている。

千里をむすぶ縁しのいと

牧 尾 良 海

杜陵というところに、韋固という人があった。この人は、幼少の頃にもう両親をなくしていたので、早く妻をめとりたいものだと考えて、諸方面に口を掛けておいたが、どの縁談も一向にまともならなかった。

貞觀二年のことである。彼は清河地方へ遊歴に出かけようとして、その途次、宋城の南の旅館に宿をとった。ところが、偶々同宿の客の中に、前の清河県の司馬の職をつとめた藩昉という人の娘を世話しようという者がいて、早速その翌日の早朝に、旅館の西にある龍興寺の門の所でこまかい話をとりきめようということになった。

韋固は、この縁談に大層乗気になっていたのので、翌朝になると、朝まだきうちに指定の場所へ

出向いて行った。まだ夜はあけきらないで、新月がななめに中天に懸っていた。薄暗いその四辺を見廻すと、一人の老人が、布の袋にもたれかかって、石段の上に腰をおろしていた。そうして、月光をたよりに何かの書物を読んでいる風であった。韋固は、さりげなく近付いてその書物を覗いてみたが、その字はさっぱり読めなかった。虫篆体でもないし、八分体や古代の科斗文の書体でもないのである。

韋固はその老人に尋ねてみた。

「おとしよりの御覧になっているのは、一体何の御本でございましょうか？ 私は幼少の頃から苦心して勉強しまして、これでも大ていの文字は皆識っております。西の方の国々の梵語でも読む

ことができるのです。然し、この書物の様な字は今まで見たこともございませぬ。一体、何という書物なのでしょううか？」

老人は笑いながら、

「これは世間にざらにある様な本ではないのじゃ。あんたが見たこともない筈じゃ」と答えた。

「それじゃあ一体、何の本なんですか？」

「幽冥界の本じゃよ」

「貴方が幽冥界のお方だとすると、何でもんな所へ来ていらっしゃるんですか？」

「そりゃあ、あんたがこんなに早く明つぱらからここへ来るからじゃよ。儂でなければ来るわけがないのだ。陰府の役人は、皆人間界のことをつかさどっておるのだ。陰で人間のことを色々と差配するものが、どうして白日の下で行動することができよう。今、道を歩いている者の中には、人間もいるし、中に混って鬼もいるのだよ。あんたにはその見分がつかないだけのことだよ」

老人の言葉に、韋固も不思議に思つて又訊ねた。

「それでは、貴方が専門になさっているお

仕事は、どんな方面のことなんですか？」

「儂の受持は、世間の婚姻関係の文章だ」

これを聞いて韋固は大層喜んで言った。

「実を申しますと、私は、小さい時に両親に死に別れましたので、早く結婚して子供を沢山にこしらえ、吾が韋家累代の香煙を絶やさぬ様にしたいものだ、かねがね考えていました。その後十年余りも人に頼んで嫁を探しているんですが、どうもこれはという話にぶつからないのです。今日もある人と約束して、ここで潘司馬の娘さんを貰うについての細かいことを相談することになっているのですが、どうでしょう、この話はうまく進むとお思ひですか？」

「その話は駄目じゃ。あんたの奥さんになる人は、今、まだ三歳だ。この子が十七になった時に、あんたの家へ嫁に来る筈じゃ。」

韋固は、こんな雲をつかむ様な話では仕様ががないので、今度は話題をかえて、老人の持っている袋の中味のことをきいてみた。

「これは赤い色をした紐だよ。これでもって夫婦の足をつなぐのだ。ひとくみの、夫婦となるべき男と女とが生れると、この儂が両

方の人間の知らぬ間にそつとこの赤い紐で彼らの足をつなぎとめておくのだ。たとえそれが敵同志であるうと、身分に貴賤の隔てがあろうと、はては呉と楚という様な遠距離に分れて役についていようと、儂が一旦この紐で結んだら、誰でも道れることはできぬのじゃ。あんたの足は、さっき儂が言つた三つになるその女の子の足に紐でつながっているのじゃ。だからどんなに余処を探し廻つてみても、無駄骨をおるだけだよ」

韋固はそこで、

「私の妻になるというその女の子は、どこにいるんでしょうか？ その家は何をしているんですか？」

と尋ねた。

「旅館の北の、野菜をあきなっている婆さんのうちにいる娘がそれじゃ。」

「一度その子を見ることが出来ますか？」

「陳婆さんは、大抵その娘を抱いて市場へ野菜を売りに来るから、儂について来るんなら、儂が教えて見せて進ぜよう」

夜はすっかりあけきつて、四辺も明るくなったが、例の会う約束の人は遂に来なかつ

た。件の老人は、書物をさっさとしまひこむと、袋を担いで立ち上った。草固もその後について野菜市へ行ってみた。すると、一人のすがめ、老婆が三つばかりの女の子を抱いてやって来たが、ひどいぼろを着ていて、全く見るかげもない、情ない風態であつた。

老人はその女の子を指さして、

「この子があなたの未来の妻になる娘つ子

扉の御法語

この御法語は登山状に出ています。十戒とか四十八戒とかの、要するに悪いことをしないように努力しながら十念を唱えるようにしたいということです。

この句の前にこんな御詞があります。

「念仏を修せんものは、余行をそしるべからず。そしらばすなわち弥陀の悲願にそむくべきがゆへなり。」

同じ仏道を修するものが、互に他をそしめることは、ともに偏執の心をもとにして議論するからであり、決して正義にかなうものでもなければ、仏意にそつたものでもな

じゃ」

というのである。

草固は黄面白くもないので、ぶりぶりしなから言つた。

「こんな子供、命を断つてしまつたらどんなのですか？」

「めつそうもない事を言いなさる！ この子は、生れながらの天命として、朝廷からの俸禄を受けるべく定められて居るのじゃ。やがて、あなたの身分が上れば、食封すら受けることになる。命を断つなどは、飛んでもないことじゃ！」

老人はこう言つて、やがて間もなく何処かへ消えてしまった。

草固は旅宿へ帰ると、早速ひとふりの短刀をときあげて、下男に渡すと、

「お前は、何事によらず良くやってくれるが、今度は一つ、私の為にあのめ、つ、かち、婆のところの女の子を殺して来てくれ。そうすれば、褒美としてお前に一万銭を遣うらう」と

とて、彼女を殺す様に約束させた。

さてその翌日、草固の下男は短刀を懷中に忍ばせて青物市場へ行き、人の混み合つてゐるのにまぎれて、あつと言う間にかの女の子

を刺して逃げ出した。

市場の中はこの棒事で大騒ぎになったが、下男の方は巧みに逃げて戻つて来た。

「ちゃんとうまく刺したのか？」

草固が念をおすと、下男は、

「最初、心臓のところを狙つたのですが、つい、外れて、眉間のところを刺しました」と言つた。

草固は、その後もあれこれと縁談を進めてみたが、一つとして気に向く様な話はなかつた。こうして又、いつの間にか十四年の歲月が流れた。

草固は、父親の遺功のおかげで、相州の参軍の職に就いていたが、当時の相州の長官・王泰は彼を司戸の次席として仕事をやらせ、専ら犯罪の審理に当らせた。そのうち、王泰は草固の有能なのに惚れこんで、自分の娘を彼にめあわせたのである。この娘は年は十六・七で、大層精緻の美しい女だったので、草固もすっかり満足していた。ところが、奇態なことに彼女は、眉間のところに何時も一枚の花黄をはりつけていて、どんなことがあつても、風呂へ入る時でさえもそれを取つたことがなかった。そこで、結婚して一年余り

い。そして更に語をつがれ、

「五逆十惡の衆生の一念十念によりて、かのくに往生すといふは、これ觀經のあきらかなる文也。たゞし五逆をつくりて十念となへよ、十惡ををかしして、一念を申せとすむるにはあらず」

と注意された後に扉の御法語に続きます。できることなら十戒も保ちたい四十八戒も守りたいと念願します。しかしよくみると一人もこれができる人はいませんし、三世の諸仏でなければ望めないことだと判ります。善を修すれば善い報をうけ、惡を行すれば惡道の果がくることは、因果の道理でよく判っているが、悲しいかなこの道理すら知らないような日常が實際のすがたです。だからといって善は善、惡は惡であるわけですから、分に従って惡業から遠ざかり、縁にふれて念仏を行すべきであります。

「惡人をすてられずば、善人なんぞきらはん。つみををそるは本願をうたがふぞといふは、この宗にまったく存ぜざるところ也」

すぎたとき、韋固が詰め寄ってその訳を訊ねると、妻は急に涙ぐんで、

「妾は、ここの王長官の姪に当るもので、本当の娘ではないのです。ずっと先に、妾の父の父親は宋城で役人をしていたので、不幸にも在職中にそこで死にました。妾は当時まだほんの赤ん坊で、母や兄も父に相ついで死にました。たった一つだけ、下屋敷が宋城の南区に残っていましたので、妾は乳母の陳氏と一緒にそこに住んでいました。そこは旅館街に近かったので、乳母は野菜をそこへ売りに行つては妾たちの暮しを支えていたのです。乳母は、妾がまだ小さかったので、それこそ片時も妾を手離さないでお守りしてくれました。丁度妾が三つの時に、乳母はいつもの様に妾を抱いて市場へ行ったんですが、そこで、誰とも知れない惡ものの為に刀で突き刺されましたので、その時の傷痕が今でも残っているのです。こうして花黄で隠していますのも、その為なのです。七八年前に、叔父が盧龍県の従事になりました時から引きとられまして、その娘分ということにして貴郎に貰つていただいたのです」と語った。

「その陳婆さんという人は、片目じゃなかったのかね？」

韋固が聞くと、彼女は、

「そうなんです。どうしてそんなことを御存知なんですか？」
と、不思議がった。

「実は、短刀であんたを刺したのは、この私がやらせたことなのだ。全く不思議なことがあるものだ。」

韋固はそこで、早朝に奇妙な老人に出会つてからのことなど、一部始終をばすつかり懺悔告白し、それからというものは、宿縁の深さに感謝して、益々敬愛し合う様になったのである。後、二人の間に男の子が生れて、韋固と名付けたが、この子がやがて出世して囉門の太守となつたので、韋固の妻も太原郡太夫人として封ぜられた。上天から定められた命運というものは、やはり人為で変えることはできぬものである。宋城の県官はこの話を聞いて、かの旅館に「定婚店」という名を題したということである。

(原名「定婚店」続玄怪録より)

(大正大学教授)

近代高僧伝

称譽雷雨伝



のできないことを悟って、時偶々粟田の定信院に滞在していた、当時高德の誇れ高かつた徳本上人の弟子の徳住を訪ね、法門を聞こうとして叡山を後にしたのは天保十年（一八三九）のことであった。

霞たなびく春の山、夕もやけむる夏の山、紅葉に日照る秋の山、白たえ重なる冬の山と四季とりどりの姿をよそおう比叡のみ山は、京洛の人々の心をやわらげ楽しませてくれるばかりでなく、日本人の誰でもが親しみを感ずる山であり、平安の昔から日本文化の淵藪の地として著名な山であった。従って此の山に、古往今来学問を志し、修行しようとするけなげな青年僧のあこがれ集まる数も夥しかったのであり、江戸末期叡山に登った雷雨も其の一人であった。しかし彼の生地や俗系については知るに由がない。ただ初め叡山に登り天台の奥義を究め、後安楽律院に住したことが知れるのみで、彼の師についてすらはっ

きりとはわからないのである。

叡山によって寛和元年（九八五）建立された安楽院が、四分律をとりいれて厳肅な戒律主義を標榜し、四明天台の学風を鼓吹せんがために律院と改められたのは元禄六年（一六九三）のことであった。律院を開いた靈空は併せて即心念仏を説いたけれども、これは四明の真義を伝えたものではないとの非難をうけたこともあり、ここでの生活は専ら持戒と観察を出すものではなく、安心立命を得るということは容易なことではなかった。雷雨が最初叡山に登り、剃髮得度した時、与えられた法名は真相といった。

真相が或日のこと、天台では到底安心立命

徳住は三河国碧海郡大浜町角谷大十の家に生れ、九歳の時棕岡雲谷寺の真誓に従つて剃髮し、十五歳を迎えた春江戸に上り、増上寺に於て学を修めて、宗成兩脈を相承し、中山道本庄の宿円信寺に住したのは三十余歳の頃であったといわれる。その後小石川の伝通院で、徳本行者の教化を受けてより後は、忽ち生活を一変して、住地円信寺を捨てて一行院に入り、一心に修行をつみ、一食長齋、昼夜臥することなく、日課念仏十遍の荒い修行を實行されたのであった。行者の滅後、三河に帰る岩屋の滝・黒瀬の滝にたたかれて身を浄め、昼夜不眠の念仏は依然として続けられ、文政十一年（一八二八）十一月には進んで具足戒を受け、法隆寺の叡辨和尚の証明を得ることができた。その後信州唐沢山で一千日の別時念仏を修し、尾張では城主を化益する

等、念仏の勸化は遠く諸州におよび、大樹寺
隨養上人の好意によって荒井山に九品院を建
てたのは文政も末の頃であった。以来伊勢・
大和・河内・紀伊・丹波・丹後に行脚の歩を
すすめ、天保八年（一八三七）京都に入り、
粟田青蓮院宮の厚意によって定信院に留錫
し、日々公請に赴いて浄土の宗義を講ぜられ、
時に貴顕の人々も念珠を手にして、念仏をは
げまれたと伝えられている。この頃、都の内
外に徳住の名は、高德の僧として響きわたっ
ていた。真相が比叡山を下り、定信院に徳住
を訪ねたのも、此のような機縁からであつた
らしい。

真相が浄土の法を求めて、定信院を訪ねた
日は折悪しく風雨がはげしく、雷鳴ひびきわ
たるという日であつたので、直ちに名を雷雨
と改め、徳住を師として浄土宗に法籍を移す
ことになった。以来、師の膝下にあつて宗乗
を究むると共に、念仏を修すること厚く、後
日江戸に下り増上寺に入つて宗戒兩脈を相承
し、観蓮社称誉と号した。徳住のもとでくら
した定信院での生活がどのくらい長く続いた

かは知るに由もないが、神阿隆音と共に同居
したのはさ程長い時期でもなかったらしい。

神阿隆音は徳住の甥に当り、天性頗る学問
を好み、常に読書に耽られたが、これは徳住
の好むところではなかった。徳住にして見れ
ば読書は念仏のさまたげになるとして斥け、
唯いたすに念仏の一行をのみ勧められたの
であつた。所が隆音は読書を捨て去ることが
できず、ひそかに人目をしのんで書をひもど
いたことも幾日あつたことか。或日のこと、
徳住が後夜の勤行をつとめようとして、本堂
に上ろうとした時、しきりと線香の香りがす
るので、その原因を探らんものと幾つかの部
屋を明けられた時、まだ眠らないで、線香を
吹きながら明りをつとて読書をしていた隆音
を見付けたという。これにいたく感して、こ
れから後は隆音に一日をおいて読書を許した
ということである。この頃、同門にいたのが
雷雨であつた。彼も既に叡山にあって天台を
究めた学匠であつたから談偶々法義を論じ、
世態を論じあうことも屢々であつたが、如何
なる人に対しても自分の信じたことを徹底的

におし通して、一歩もゆづることのない二人
の性格は互に相い容れるところとはならず、
常に激論がたえなかった。不和勝であつたた
めに、年来の志を得ないままに、雷雨は何か
と心になやみ、遂に意を決して山城駒郷の阿
弥陀寺に隠棲し、静かに念仏して浄業を修す
ると共に、天台の研学にいそしみ、月の夜に
は前庭に出て阿字観とか、月輪観にふけり、
密教の行法をも修していたということである
その後、東山知恩院の山上にある祖廟の南
隣一心院の招きに応じ、副住として住し、傍
ら彼の学殖を慕う人達に天台を講じたことも
あつたが、明治九年（一八七六）八月正住と
なつて五十四世の法灯をついだ。以来、称念
上人の法闡を慕つて戒律を厳持すること堅
く、静かに念仏して自行を策勵していたが、
偶々病を得、同十二年四月七日灌仏会を前に
して、「天台戒疏講述」三巻・「十不二門講
述」一卷等の著書をのこし遷化せられた。尚
師の学殖をついだ人として、自他共に認めて
いたのは門弟多いものの中にも、勸恩義城が
其の最なるものであつたらう。

（大橋俊雄）

寒蟬ひぐらしに送られて

鈴木成元



(成徳寺中尊仏)

常磐線沿線で活気のあるのは平地方である。ここは湯本・好間等を中心とする常磐炭田と、小名浜・四ツ倉等の漁港を控えた土地だけに、言葉の尻上りと気の荒さは自然的条件なのかも知れない。

この平地方にあり、それらの末寺も沢山あって、当地方全寺院数の六十パーセントを占め、まさに浄土王国である。けれども土地の人々は昔から信仰心が少なく、当地出身の祐天上人も布教には頭を痛められた。そこで一

東北の浄土宗寺院は名越派が多い。山崎の専称寺・矢の目の如来寺・折木の成徳寺は、名越の三本山として

案を残されたのが念仏踊である。

これは「自安我業（じあんがら）念仏」といわれて今に残っており、民謡ブームにつられて、時々お江戸のコンクールに出るようである。それは腰に太鼓をぶら下げたキャブデシを中心として、その周囲に鐘を持った人達が輪になって、

ナアーヘー モーホエ

と南無阿弥陀仏を適当な節で歌い込み、その次は、

飯でばがんだ飯、お汁でば茄子汁など、即興的な面白い語でつなぎ、不思議な

呪文を称えるように、意味のとれない歌を歌って悦に入りながら、手拍子おかしく踊りまわるのである。そのリズムとフォームは当世派のマンボどころの比ではない。踊手も観客も共に熱況するところはロカビリーに相通づるところがあるかもしれない。終戦後間もなく平駅のホームでこの自安我棄念仏を実演したことがある。当時は特別臨時の進駐軍列車が通るころで、ホームには多くの黒人を乗せた列車が停車中であつた。彼等は折よくこれを見て、オー ジャパン ダンス ワンダフル ワンダフル としきりに賞讃された。何処か自國のリズムに似たところがあつたのかもしれない。大抵は旧盆月中に行うのであるが、毎年七月十三日に行われるコンクールにそなえ、数カ月も前から練習して、その日の来るのを待っている処もある。また処によっては仏の供養といつて、お葬式の出棺直前にやることもある。けれども一般には、仏の供養の名のもとに行う老若男女の娯楽で、弥陀崇拝の思想はほとんどない。しかしその由来を尋ねると、祐天上人云々と一応の理屈はいふから面白い。

それはともかくとして、平より北へ汽車で三十分、全く片田舎の広野に着く。駅より南へ少し歩くと小高い森が見える。あえぎながら坂道を上ると成徳寺の門前である。そこにはすぐに異様な建物が目につく。何かで見たようなとしばし考えさせられた。それは集団生活で名高い白川村の家を想像させる庫裏であつた。十一間四面の本堂もなんとなく小さく見える。瓦葺の本堂と萱葺の庫裏は全くいい対象で、周囲の森を通して来る風はそぞろに涼しさを感じさせる。

成徳寺は元徳二（一三三〇）年、良天上人によって開山された名越派布教伝道の最古の寺で、如来寺と共に学問所として幾多の名僧を出した。何といつてもその第一人者は当山十三代の袋中上人であろう。上人のことについては今更いふまでもないが、多くの本を書かれ、宗義顯揚のためにもっともつくされた場所である。その後成徳寺を弟子の良憲に譲り平に隠居した。そこで平城主岩城貞隆の帰依を受け、城内に菩提院袋中寺を創した

が、まもなく貞隆は秋田の亀田に左遷され、これも一つの動機となつてか入明を志された。ところが折悪しく琉球に着いてしまい、入明の志は遂げられなかったが、琉球に浄土教を布教する大きな功績を立て、帰朝後も諸国を廻つて廢寺の復興と伝道につくされた。



（成徳寺全景）

成徳寺は三回の火事で、七堂伽藍が揃って
いたという昔の面影はない。しかし第二次大
戦に提出を免かれた梵鐘と中尊仏にはその片
鱗が見られる。中尊仏は重要文化財であり、
東北の浄土宗寺院には珍らしい。伝えるこ
ろによると、この仏像は運慶の作といわれて
いるが、どうも快慶の作であるらしい。また
この仏像は尾州杉山城主のもので、織田信長
に攻められた時持って逃げたものであるとい
うことで、その真偽のほどは分明でないが、
そして運慶・快慶はともかくとして、何とも
いえない有難味のある仏像である。私のよう
なボチボチが見てさへそうであるから、心あ
る人は尚更であろう。とても私には表現しつ
くせないで、写真を見ていただきたい。

堂の廻廊には朱塗の駕籠が下っていた。
それはさておき、名越派で行った加行の語
には全く驚いた。名越派は一唱一礼で冬期百
カ日の行を行ったとのこと、行は専称寺で行
うのであるが、山下を流れる夏井川の清流で
朝夕水を割って行水し、水中で般若心経三巻
を称えるのだそうである。現在の加行と比較
するとどうであろうか。身延山の荒行が種々
騒がれているようであるが、それよりももっ
と厳しかったようである。往時を回顧し、穏
な口調で語る老僧の話には、目下自分がその
加行を受けているような錯覚を起し、コッソ
と身を打たれたような緊張を覚えた。

いろんなことを連想しているうちに、ねじ
鉢巻、波に千鳥の浴衣を着た若者達が十数人
お参りに来て、やっと我にかえた。一見し
て漁夫であることがわかる。彼等は彼等なり
のユニホームを着て参詣に来たのであろう。
実に元気がいい。これから遠洋漁業に出ると
の事で、参詣方々お賽銭をもらいに来たとい
う。寺社にお賽銭を上げるとは聞か、も
らうのは初耳である。彼等は逆縁起をかつぐ
ためお寺の賽銭は厄除のお守で、これを持っ

ていたために、洞爺丸沈没の時同じ水域にい
ながら、僅か五十噸そこそこの漁船で、風に
向って油を流しつつ、満載した二万貫の魚と
共に助かったという。彼等は文学的表現をす
るのでもなければ、誇張するのでもなく、ぼ
ったりと語る。しかしその経緯談は尊
く、聞く人の胸を強く打ち、小説などは比較
にならない。実話ほど迫力のあるものはない
とつくづく思った。

日中はうるさく鳴きたてた蟬も、いつしか
物寂しい寒蟬の聲に変わり、少しの間をおいて
強く或は弱く、周囲の山谷に木霊するそれ
は、遠く私を送るかのようであった。

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込
み次第無料で見本「浄土」をお送りし
ます。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一
冊贈呈します。



大正大学教授 竹中信常著

新興宗教

たかいをはじめてから
七年間、最近では八十
万の信徒を擁する大王
国をきずき、新興宗教
の中でも特異な存在と

されまい。故戸田会長が、「いまこそチャ
ンスだ」と感じたと同じことを、いまわが
身にふり返ってチャンスにめざめることが
何より大切である。

創価学会が「折伏大行進」を宣言したの
が、昭和廿六年の五月のことである。その
当時会長戸田城聖氏は「チャンスは今だ」
と感じたという。その理由として、一に、
天皇の権力がいつまでも発動して宗教を弾
圧することができなくなったということ、
二に、民衆が苦しんでいるということ、三
に、立正安国論にいうところの、他国侵逼
難（侵略の国難）つまりアメリカの占領を
うけているということである。アメリカの
重圧のもとで、失業者はあふれ、月給は安
すぎて食べていくのがやっとである。そこ
で民衆はこの苦しみより逃れようと強く求
めているが、共産党でもそれにこたえるこ
とが出来ない。「いまこそ折伏を展開する
チャンスだ」と考えたというのである。そ
して、当時わずかに二、三千の会員をひきい
て「日本を救い、アジアを救う」折伏のた

ある。その創価学会の天皇と仰がれた、戸
田城聖氏が、去る四月二日、肝硬変症で突
然他界した。亡くなった直後、起死回生の
大熱湯がつけられたとも伝えられるが、
その効目も全くなき、五十八歳のはらんお
おき生涯は呆気ない幕切れとなってしまう
た。

さて、この「偉大なる独裁者」を失った
創価学会はいずれにゆくだろうか。いまの
ところ目立って結果はあらわれてはいない
が、いずれにしても、その死によって最大
の危機に直面したことは事実のようであ
る。

聞くところによると、この新興宗教デラ
ックスの流行に、いささかかげをひそめて
いた、他の新興教団が最近はなかなか尖鋭
的にうごき出しているともいう。このとき
にあたり、既成教団も、傍観的態度はゆる

このときに、前掲の書が刊行されたこと
は、その意義と価値はきわめて大きいと云
わねばならない。いままで新興宗教の解説
書は数多くでているが、いずれも似たり寄
ったりで多くの新興宗教の批判者が、その
対象となる宗教について、あまり精確な知
識をもたないことが問題であるが、こんど
刊行された本書の特色は、資料も豊富に客
観的に批判・追及していること、新興宗教
の心理的分析がなされ、信仰の在り方につ
いても具体的に説かれていること。さら
に、既成教団における、檀家組織、寺と墓
地等についても、この現実の問題について
めいめい解明と指導があたえていること
等である。著者の専門は宗教心理学である
が、その独自の立場から説き明かされた本
書は、また一般の方々への、正しい信仰の
手びきともなりうる親切な本である。

（新書版八九頁・定価五十円・送料八円）

東京都芝公園十九号
発行所 浄土宗務所 教学部



法然上人の言葉

— 第四回 —

増 谷 文 雄

「学生骨になりて、念仏やうしなはんずらむ」

（「つねに仰せられる御詞」）

この一句は、法然が、いつ、誰にむかつて語った言葉であるかを、詳らかにすることができないが、古来から、「つねに仰られける御詞」廿七条の第一四におさめられていて、数おおいこの上人の言葉のなかにおいても、もっともその人の肌のあたかみを感じうる言葉のひとつである。

よく知られているように、この上人は、かの時代において「智慧第一」の誉をほしいままにした方であった。のちの袋中良定のしるすところによると、保元三年（一一五八）のころ、関白藤原忠通は、諸宗の碩学をあつめて、十五カ月 にわたり、「往生要集」を講説せしめたことがあつ

た。法然はその時なお二十六歳の若冠であつたが、その講説もっとも勝れて、「智慧第一の誉」を得たという。その誉れたかい「智慧第一」の称は、この上人の生涯を通じて、いつも付き纏っていた。選択本願念仏の唱導者として、罪惡生死の凡失の旗頭となつて、みずから「愚痴の法然房」と称するにいたつても、この「智慧第一」の称は、いぜんとして彼につき纏っていた。そのことは、世間の常識をもつてすれば、すばらしいことであつたに違いないであらうが、いま「愚痴の法然房」に一転して、罪惡生死の凡夫の道をゆかんとするこの上人にとっては、果して、好ましいことであつたであらうか。いな、そのような栄称のみの問題ではない。もっと本質的には、この上人が頭脳明晰にして、智慧知識において秀でていたということ、その

ことは、選択念仏の徒としてのこの上人にとって、いったい、プラスになったであろうか。それともマイナスになったであろうか。

「学生骨になりて」とは、まことに、興味深々たる表現である。ここに「学生」というのは、学者のことをいうのであって、今日のいわゆる学生がくせいのことではない。学問の道というものは、はじめあって、終りなきものであるから、勉強中のものを学生となし、別に、勉強を了った学者というものがあのように考えるのは、常識のあやまりというものである。真の学問の道においては、今日のいわゆる学者も学生も、みなともに、終りなき学問の道をたどる学生であらねばならない。さて、そのような「学生」が「骨になる」とは、いわゆる、こちこちになって、血もなく、肉もなく、神経の通いもない、骨ばかりになることである。ヨーロッパの言語においても、スケリトン skeleton すなわち骨格もしくはは、され、こうべは、ひからびるという動詞から生れているのであるが、いま、学者がひからびて、さき、こうべになってしまうというのは、どういうことであろうか。それは、私ども、学者のはしくれとして学界に身をおくものには、よく解ることであるが、たとえば、宗教というような生きた人間の全身全霊に関する事柄を学問の対象

として取扱っていながら、学者のしばしば陥るところの弊は、知識や体系や論理にこだわって、いつの間にか、生きた人生をわすれ、人間の全身全霊の問題であることを忘れてしまうことである。

そもそも、学問と宗教とは、本来まったく異質的なものである。宗教そのものと宗教の学問知識とは、まったく別箇のものである。宗教は、言うまでもなく、体験的なものを基底として、その上になるところのものである。生命に即して存する事柄である。しかるに、体験とか生命とかいうものは、具体的で、流動的で、そして、全人的なものである。それをつかむには、生命をもって生命をつかみ、体験をもって体験を了解するよりほかはないのである。しかるに、今日私どもの當む学問もしくは知識は、主として概念をもって仕組まれている。概念とは、流動的なものを止め、具体的なものを抽象し、個体的なものを分析して得られる。だから、そこでは、生命的なもの、体験的なもの、全人的なものは、概念形成の過程において、すでにその本質的なものを失っているのである。生きた体験が死んでいるのであり、全人的な信仰がばらばらにされているのである。だから、もしも、学者が概念や体系のとりことになってしまつて、ひからびたさき、こうべになったときには、生き

た宗教的体験などというものは、まったく縁のない代物となってしまう。それをいま、選択念仏の道にあてていかなれば、

「学生骨になりて、念仏やうしなはんずらむ。」

と言うことになるのである。学問の体系や教義の組織のことなどに心を奪われた途端に、生きた念仏はどこかに消し飛んでしまうのだというのである。

この言葉が、まことに法然らしい言葉であって、その肌のあたたかみさえも感じられるような気がするというのは、ほかでもない。そのような危険のまえに身をさらしている第一の人物は、法然その人であつたからである。私は、ふと、この上人は、この言葉を自分自身にむかつて言いきかせたのではないか、とさえ思ったことがある。何となれば、この上人は、智慧第一のほまれをほしいままにした人であり、学解をもつてしても、よく当代の第一人者であり得た人であつたからである。多分、そうではなくて、誰か知識のことにこだわる念仏の徒のために説いた言葉なのであるが、それにしても、この言葉のなかには、この上人自身の体験と苦心が、脈々と生きて脈うっている感じがする。

おなじく「常に仰せられける御詞」のなかに、つぎのよう

な一節がある。

「上人常の仰には、源空は智徳をもて人を化する、なを不足なり。法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども、念仏の大先達として、あまねく化導ひろし。我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、念仏勤行の人たらんとぞ、仰られける。」

わたしどもは、この上人が、「源空は智徳をもて人を化する、なお不足なり」となげく言葉を聞いても、ただとまどう許りである。もしも、この上人にして、なお智徳の不足を歎かねばならぬとするならば、いったい、誰が人を化するにたる智徳をもっているといい得るであろうか。だが、よくよく考えてみると、この一文においての法然のなげきは、智徳のたらざることではなくて、むしろ、その多すぎる。すくなくとも、智慧第一の法然房が、その腦中に藏するところのもの余りに多くして、それが却つて、選択本願念仏の大先達として、邪魔になるといふのである。

だから彼は、法性の空阿をあげて、その愚痴をうらやみ、その化導をうらやみ、自分もまた生れかわつてまた人身をうけることができるときには、その時には願わくは、大愚痴の身となつて生れきたり、空阿のような念仏勤行の

人となりたいものだという。

法性の空阿弥陀仏（一一二三八）は、はじめ叡山に入り、のちにこの上人の道にしたがうものとなった。経をならうこともなく、学をもとめることもなく、ただ仏名を口に唱して、諸方を遊化し、生涯住房にとまることがなかった。遊化念仏のときには、いつも小さな鈴をたずさえて、その清らかな音に心をかたむけ、淨土の宝樹にそよぐ風の音もかくやと許り、ほればれと念仏に身をたしめたという。

法然は、その空阿がうらやましいという。何ゆえであらうか。その故は、彼の言葉を注意ぶかく読んでゆくと、なるほどと合点ができるように思われる。この他力念仏というものは、もろもろの智者たちの沙汰する觀念の念仏ともちがう。あるいは、學問をして念の心をさとして申す念仏でもあらぬ。ただ、往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申しさえすれば、うたがいがなく往生するのだと思ひとて念仏を申す。そのほかには、別の子細はまったくない。だから、

「たとひ一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、凡入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念仏すべ

し。」

それが、かの「一枚起請文」のむすびの言葉であった。だが、智慧の実というものは、一度これを味わい食ったものを、もはや、ふたたび、無智のともがらには帰してくれない。學問のほこりは、はらえども、はらえども、どうしても、払拭しきることはできない。智者のふるまいをすてるといふことは、言うはやすくして、徹することはなほだ難いのである。法然ほどの人にしても、おそらくは、そのことの難きを身にしみて感じていられたのではないであらうか。

そのことにつき、遠江の蓮華寺の禪勝房（一一六四—一二五八）なるものが伝える、法然の言葉の一節は、まことに興味ふかく思われる。その言葉は、まず、道心者や智者などの念仏は往生できようが、「あけくれ罪をのみつくり、一文字だにしらざらんもの」の念仏は往生不定であるなどというのは、とんでもないことであつて、かえつて、念仏往生の義をむつかしく論ずる輩は、「つやつや本願の義をしらざる人と心うべし」と断じ、そこから、翻つて、法然は、「もとの法然房にては往生はえせじ」とみづから省み語り、そして、

「されば、としごろならであつめたる智慧は、往生のた

めには要にもたつべからず。されども、ならひたるかひには、かくのごとしりたれば、はかりなき事なり。」と結んでいる。その結びの言葉は、味わえば味わうほど興味がふかい。

もしも、法然が、あれほどの智者でなかったとしたならば、この本願念仏の道を、決然として選択する見識は、どこからも生れて来ようがなかったであろう。また、あれほどの深遠な学解がなかったとしたならば、この他力往生のおしえを確乎として、旧仏教者たちの批謗のあらしの中に確立することはできなかったであろう。まさしく、ならい來った學問智慧の効果は、はかることも出来ないほどに大きい。だがその智慧によってもたらされ、その學問によって確立された、この新しい道は、その智慧も、その學問も、まったく要にたないものであった。一文不知の愚鈍の身になって信じ入るべきもので、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべきおもむきのものであった。そのことは、考えてみると、まことに皮肉である。おそろしい矛盾である。その矛盾を、法然は、ただひとりして負ってゆかねばならなかった。

それのみではない。この上人はまた、しばしば、つぎのような質問によってなやまされた。

「智慧もし往生の要事となるべくは、正直に仰せをかりて修學をいとむべし。又ただ称名不足あるべからずは、そのむねを存すべく候。たゞ今の仰せを如來の金言と存すべく候」

心に本願を信じて、口に念仏すれば、それだけでよい。そのことを法然は、繰返し繰返し力説している。だが、その法然その人は、智慧第一の人物である。やっぱり、智慧が往生の要件ではないか知ら。その門下にとって、そのような懸念がいつまでも残る。そのことを、もう一度きいて見たいというのが、この質問者の心であったであろう。

考えてみると、この他力念仏の道は、智慧にたいして、まったく矛盾した關係のなかにある。その矛盾のまっただ中にたっているのが、法然その人にほかならない。そのことに思いをいたしながら、もう一度

「学生骨になりて、念仏やうしなはんずらむ」
と口誦さんでみると、そこには、法然その人の心の秘密にふれる思いが存するというものである。

(東京外国語大学教授)

死と儀礼

稲垣真我
阿川貫達

第一話

私は現在寺院の生活をしていないが、若いときには寺院生活をした経験があります。二十五歳で正大の研究科を出てから、十年間だけ寺院をやり三十五で寺院をやめて今日に到っており、今は庵室生活をしているのであります。つまり十年間にどうして今日をあらしめたかと云うと十年間に直接ではないが、この私に信者がついていたのであります。この信者がいたために私は魂を入れ換えさせ、これではいけないと思ったのです。坊さんでなれと思ったのです。その信者に坊さんにならしてもらったのです。この人は浄土宗の恩人ともいえます。朝鮮に千力寺あった内五、百力寺を一人で建てた人です。朝鮮開教の主であります。遊賀県四日市の出身で東西高瀬

合名会社と云います。一人は徳永氏と云い、

一人は高瀬氏で高瀬氏が本家で高瀬合名会社と云います。すでに大正六年に三千万長者番附の日本の二十一番目になっていたのであります。その勢いをもって、その勢いのないときから朝鮮のお寺を全部建立したと云ってもよいくらいです。藍綬褒章を二人とももらっているのです。浄土宗の坊さんでも、金杯、銀杯の賜杯を二人はもらったでしょう。会堂の記念館は銀杯の記念館ともいうべきものです。

そういうような大きな事業をやった人が非常な篤信者でした。その家族全部が信仰者で、その会社の従業員を合せて百三十人位の大家族であります。そこへ月に六回位の御説教を自宅にしに行かねばならないので、住職

はまいつてしまいます。その主人は三部経を自由に読みますし、浄土宗全書の続編まで持つており、精読しているのです。日置黙仙はその最初の人で、浄土宗では井上玄真、この人は唯識の学者で東洋大学で教授をしておった人です。それから増上寺の管長になられ、大僧正になられた道重上人、更に広安真隨。そして、山下現有大僧正には最も信頼し帰依されておった。

その人の家に説教に行くと全部はうりだしてしまふ。早い話がおられないようにしてしまふのです。御布施は同じ様にくれるんですが、皆な交代してしまいました。そこで私が交代したのです。私が行きました時には、あの釜山の一千軒の檀家をもっていました。その当時、朝鮮一番の寺が六カ月も無住であつたことでも証明できるのです。そこへ私が鎮南館で召兵されたのであるが、宗務所にたのむとロクでもない人を派遣するので、朝鮮に今いる中で一番若い人で、一番良い人を探しだすと云って私を探しましたのです。私はそんなに偉くないので、びっくりしてしまつた。この選任にあずかったと云うことをして

私に魂を入れ換えせしめたのです。

ところが説教が少し違ふと云われました。

私は寺がないのでぎくばらんなのです。今でもそうですが、今日はこれだけのことを思っているからちょっとだけ御説教をいたしますところ云うのです。ところが、これが大変

気に入って「今なにをやったんだ」「俺は華厳経をやったんだ」「華厳と云うのはいろんな人から聞いたが、非常に面白い、こんな話で少し五教章を講義してくれないか」と云うことになったのです。この五教章の講義も店員を解らす様にするんだから大変むずかしい。しかしそういうものをやっている内に、

店員が百三十人位いるし、家族が二家族、親戚を含めて四十人位いる。それでそれから数のおくの子供が亡くなる、女中が死ぬ、番頭が死ぬ、と云うのが一ぱいできてくるのです。

そうすると主人が全部この臨終行儀をもって、来迎仏をかけまして本当にやる。その主人が本当にその行儀をするんです。そして見

信仰実話

計って死んだと云って
ってくる。

和尚の方がまいてしまふ。そんなところに

招待されてごらんない。こつちの方がまいてしまふんです。余程そこをぬけてしまわないとかなわない。とてもつらいですよ。朝まで居らなければなりません。帰しやしませんよ。そのかわり、御風呂に入っておったならば、出てくると、下から上まで着物を全部

換えてしまわねばならない。フンドシまで全部変っているのです。全部真新しいものを着せられて、そして儀式をやるんですから、とても辛抱できるもんじゃありません。くすぐりたいと云うのはこのことだと思ひます。たいてい皆くすぐつたくてそこに居られない。

そこで私は、その臨終行儀を見せつけられたいときは非常に驚きました。五重相伝でも受者がいつても三百名位参加するのです。三年に一度ずつやるのです。それを全部一軒の家で費用を持つてんですよ。唯の五重でも三百人です。三百人が全部無料でやるんです。一度も一文もとらないんです。そして組内寺院の御布施は全部だすんです。他のお寺に行った倍ぐらいは出すんですよ、そういうことをしているんですが、六十年間もやっただけです。

七十年目につぶれたんですが、これは朝鮮が戦争にやぶれたためにつぶれたんです。その功績はおそろべきものであつて、この臨終行儀の話などは、どれほど聞かされても、この信者に頭が下つてしまふ。それで臨終行儀の本をたくさん複刊して全部家族に分けてやる。

その主人は、商売の出来る番頭になる番頭のおふえるのをまっているのです。こんな話があるんです。主人が明日起ん奴が二人位あると云つて居ると、朝起きて来ない奴がいる。そして真青になつて、かれらが一週間位死んだ様になつて居る。そして、ちよつとくらい分つたかどうかと云つてその主人がかれ等を見に行くのです。「少しは分つたようだなア」「まだまだ」と云つてなかなか許るさな。半年位は分かんぬのは承知なんです。その内にそいつが勉強しまして、店員のやっぱりいっぱしの指導者になつてゆく。それで店員は皆浄土学の、実践学の大家ばかりになつてしまふ。そこへこちらが行くのですからなかなか骨が折れるのです。そして、今が三代目でありまふ。

信仰実話

四代目に

なったその
一番主人の

全部を、私が引導を渡した、死んだ方は、四夫婦皆やっただけです。その他小さいひとをたくさんやっただけです。それで、一番先代の主人は四日市の町長であります。そのお婆さんが死くなりました時に、私はもう仏教専門学校に来ていまして、私は仏教専門学校から四回行ったのであります。同じ人の臨終行儀を四回ほどした。久保と云うおかかえの医者がおりました、もういけませんからと云いますから、すぐ私の方へ電話がかかってくる、

そこで、すぐ私が行く、そして三日位夜寝ずにやるんです。仏壇のままで行念仏をやるんです。そうして一生懸命つとめておりますとなおるんです。ついに四度目に八十三歳で亡くなった、三回生き返ったのです。

そういう臨終行儀の好きな人がいる。そういうことになる、好きも嫌いも云っておられないのです。学者や學術の話では追いつかないのです。もう好きなんです。これに相投じて行くだけの覚悟が浄土宗の坊さんに

なければ、浄土教はさかえないという気がするものであります。それはおそろしい信者が居るんですね。そういう信者がおらなければこちらから臨終行儀をやりに行くと云うようなことは、おそろくよほど偉い人で三十年位その土地に於て、伝道、教化をおこたりなくつとめたものでもなかなか困難なことです。こういう気持ちになって実際の場に立つ心がけがなければだめだと思います。そのくらい臨終行儀はおそろべき効果を持っているもので、おそろべき信仰の結晶だと云うことを申し上げます。

第二話

臨終行儀がその必要性があるか、ないかというところで、勿論私も念仏生活に入っているときには、今唱える念仏が即ちこれ極楽往生の念仏であってあえて臨終行儀を要しないのであります。しかし私どもは罪業深重の凡夫であって、念仏を退転して、その間に又我々は罪業を築くのです。これじゃいかんと云うので、念仏相続をするのであります。しかし、臨終行儀はこれができればまことに結構であるけれど、出来ないからと云って、そ

れが往生しないものではないのであります。私は自動車事故で怪我をしたことがあります。まえば、念仏を唱える余裕がないのでござい。しかしそれは平ぜい唱えた念仏によつて必ず往生させていただくと思ふんであります。そういうような、戦争で亡くなる人、今の自動車事故で亡くなる人、それは阿弥陀様の念仏を唱える人ならば、それによつて臨終の行儀をしなくても必ず往生はさせていたたくのであります。ただし信仰の無い人には普知識の必要があるのであります。今まさに死なんとしている時に私どもが何って、あなたは阿弥陀様を信じなさい、そして私と一緒に念仏を唱えさせる。もうその時には阿弥陀様の因縁、極楽の因縁そんなことを論じている場合ではないのであります。そういう時には「あなたは信じて私と一緒に念仏を唱えなさい」と云って、こちらも誠心誠意をもってこれを指導して、共に唱えて、往生してもらふと云うことが宗義のため、まゝでございます。従つて普知識の必要のあるなしは、その人に依ることです。その臨終行儀の必要も

信仰実話

は第三者には見えな
い。行く人

その人に依ることであるが、然し出来れば臨終行儀をして安らかに皆念仏を唱えて極楽に往生して戴くということが望ましいのであります。私の師匠の臨終といい、又この寺で自分の母として仕えていた人の臨終、昭和二十四年三月二十四日に亡くなりました。そしてその時私が臨終行儀をつとめて送ったのであります。その時の様子といい、それに依つて他の人がどれ程感化を受けるか、その有様に皆涙をたたえている。別に哀別の悲しみではなく、有難さ、尊さに泣いている。これは真実でなければいけないと思うのであります。からだはこの世に残るが精神、これは阿彌陀様のお迎えを戴いて阿彌陀様の御手に抱かれて行くんだと云うことを申しているのですが、群疑論をこの間開いてみますと群疑論に往生は精神が行くんだと云うことが書いてありました、ああそうすると私が思っていたことと恵懷禪師の思っていたことも同じであつたかと有難く思つたのであります。こ

水を活かす

天龍寺の峨山禪師は、或る時、侍者が手鉢の水をかえようとして、古い水を溝へすててしまふのを見て

「これこれ、お前のようにしては、水を殺すというものだ。どうせすてる水なら、

しおれかかった庭木にかけてやれ。また、ほこりの立ちやすい地面にまけ。そうすれば同じ水をすてるにしても、その水を活かすことになるではないか。僧侶というものは、どんなものでも、ありがたく、活かして使わして頂く心構えが大切じゃ」とさとされた。

は安静として阿彌陀様の御身に抱かれて行くことが往生の姿であると思うのであります。

そしてそれは真実であるが故にまわりの人々に偉大な感化を与えるものであつて、私のその母のあとを継いだ者に慶応義塾の経済の商科だかに行っている者が、私がよく阿彌陀仏や極楽を云うものだから、赤坂の伯父さんはよくそんなことを云うがそんなものはありはしないと云つていたことを聞いていましたので、その時丁度来てましたので、あとで「一夫さんお母さんが往生したのをわかりましたか」と云つたら「はい、わかりました」と云

つて居りました。

これは信仰のない人ではありますがその場に居てその情景雰囲気を見ていればこそこれを味い知ることが出来たのです。ですから出来れば臨終行儀をすると云うことは結構なことだと思ふ。出来なければしくともそれで宜しいと思ひます。ただ、平常の念仏が大切に存じます。

このお話は、稲垣、阿川両先生から伺つたものを、編集部で筆記集録したものであります。

文責編集部

せっちゃん

とんちゃん



せっちゃん、とん

ちゃんが盛に文句を並

べていると、がやがや

がや四五人の子どもの

声です。

「や、これはいけな

い。じゃ、せっちゃん

失敬!。」

蟬のせっちゃんとはんぼのとんちゃんが木の
のかげで涼んでいました。

「暑いですなあ、全く。」

「いやほんとうに。こう暑くちゃいくら我
々でもやりきれませんよ。」

「木の蔭にいたってあついですからなあ。」

「ぼくなんか水がほしくても水たまりが一
つもありませんからねえ。」

「ぼくだってもうのどが渴いて、声もから
からでジージー鳴くにもなけませんからね。」

「かといって、うっかり井戸や洗濯の水の
あるところに行けば子どもにみつかったしま
うし。」

「そうですとも。木の上でちょっとひるね
でもとおもえば白いあみがかぶさって来ます
からねえ。」

とんちゃんはあわてて舞い上りました。せ
っちゃんもじーっと一声かけ声をかけてもっ
と高い木の枝へ止まりました。
それから二三日した或る日のこと、せっち
やんととんちゃんは思いがけないところであ
ったのです。

二人の子どもが籠を下げて、大きな子ども
があみをもつて歌をうたい乍ら歩いていまし
た。一つの籠にはとんぼが、もう一つの籠に
はせみがいくつか入っていたのです。

「あつ。」

とんちゃんとせっちゃんは思わず顔をみ合
せました。

(寺田豊子)

ゲイボーイ

一瀬直行 著

男なのか、女なのか。あやしい美しさに
恵まれた新しいセックス。

青年と若い未亡人や若い娘との特異な交
渉を赤裸に描いて、倒錯した性に溺れて
行く女性の運命をあざやかに映し出した
名品。

書肆バトリヤ 発行

価 二四〇円

森と湖のまつり

武田泰淳 著

滅びゆくアイヌ民族と日本人の葛藤、
阿寒湖のほとりを背景に、血と肉の相剋
を描く野心的長篇。

新潮社 発行

価 三七〇円



素はだの人

— 千葉胤頼 —

鶴田湛泉

治承四年五月、以仁王、源三位頼政等の平家打倒の計画が、早くも平家の探知するところとなつて、難を避けるため宮は、三井寺へと遷れ給うた。

更に南都に向わんと、僧兵を供にされ宇治まで来た時、平家の軍勢二万余騎の包囲にあい力戦されたが、終に弓折れ箭つきて老將頼政は無念の齒をかんで自刃し、宮も亦、光明山の鳥居のほとりて、敵の流れ矢のため斃ぜられてしまった。

この時、王に従っていた三井寺の僧日胤は、弟子の伊賀房と共にふみとどまつて追兵と奮戦し八方に切りまくっていた。

日胤はなおも群がる敵の中に走り入り、当るを幸いに六人を斬り捨てたが、終に切り死してしまつた。伊賀房は八人を切り伏せ四人に手負を与えて、一方の血路を開くと、奈良へと落ちのびて行つ

た。

日胤は、関東の豪族、千葉常胤の末子で律静房と号し三井寺に居たが、頼朝の密旨を受けて源家復興を祈らんと石清水八幡に詣で、千日の大般若経転読を以って神助を求めんとしていた。

或日、神から金の甲を授かる夢を見て、之を不審なことと思つて、いたる矢先、たまたま以仁王が兵を起され三井寺へ入られたとき、弟子日慧をして自分に代つて祈らしめ、彼は直ちに王の許へ馳せ参じたのであった。

一方、頼政が宇治の河原の露と消えて以来、平氏から東國の平氏に、源氏追討の通状が発せられたとの噂を、単に世の浮言としてしまふことが出来なくなつたので、伊豆の配所で持仏堂に籠つてひたすら誦経三昧に耽つていた頼朝も、いよいよ平家追討の策を廻らさんとした。

先ず藤九郎盛長を密使として、

「早々、旗下に参ぜよ」
と源氏ゆかりの諸方の豪族へ檄を飛ばした。



かくて日頃頼朝を盟主と仰いで大事を明かしていた若い殿原シノハラの訪れも、日一日と頻繁となつて来た。

——
或る日、かねてから頼朝に心をよせていた三浦次郎義澄と、千著六郎大夫胤頼の二人は、秘かに北条の邸に頼朝を訪ねて来た。

胤頼は千葉常胤の六男で、下総の東莊を領していたので東六郎大夫と称され、若年の頃から京にあった。文武兼ね備えた彼は、遠藤持遠の推挙によつて上西門院に仕え、従五位下に叙せられていた。平家は彼を誘うとしたが、操持堅固な彼は権勢に阿附アツクせなかつた。

のみならず、かつて文覚の名を聞いて神護寺に文覚を訪ね、一見して互に肝胆相照らす仲となつていた彼は、文覚が伊豆に流されると、互に謀を協せて、頼朝に挙兵をしきりにすすめていたのであった。

以仁王の令旨が諸国の源氏に発せられたので、胤頼は関東に赴かんとしていた矢先、たまたま宇治の合戦となり、頼政の旗挙げに神経をとがらしていた平家の軍兵は、彼を抑留してしまつた。なぜなら宇治橋で、豪勇を謳われた日胤の兄であつたので疑がかつたのであろう。

幸い許されてやつとの思いで関東へ帰つて来たので、数ヶ月の鬱を散ぜんがために訪ねて来た由を物語ると、頼朝は家臣を拒けて兩人に対面し、刻を忘れて秘かに何事か密議が行われた。

伊豆の目代八牧の山木判官を首尾よく討取って、旗争の幸先よしとよろこんだ頼朝も、石橋山の合戦では一敗地にまみれて、漸く危地を脱すると、主従ちりちりとなり、僅かに土肥実平一人を伴って、真鶴崎から舟に乗って安房へと赴かざるを得なかった。上総に走った頼朝は、安西景盛の宅に身を寄せていた。

その頃、房総半島には、上総に上総介広常、下総に千葉介常胤という豪族がいて、この地方の勢力を占めていた。頼朝は再度の旗争げには、この両人の力を借りることが是非とも必要であった。

それ故、九月四日には、和田義盛を平広常の許へ遣わし、藤九郎盛長を千葉介常胤の許にそれぞれ遣して「味方に参上せよ」との趣きを伝えしめた。

二日目の六日の晩、義盛が帰って来て広常の返事をこう伝えた。

「いづれ千葉常胤ともよく相談してしかるべく御挨拶いたしたい」諸豪の動向がよく分らぬ間に、平家を捨て源氏につくのは危険と思つたのか、形勢を望観して同族の去就を見てから、態度を定めようとする腹であつたらしい。

頗る煮えきらぬ広常の返事に、頼朝は心の底に、不快の念を禁じ得なかったのはいうまでもない。それから三日遅れて九日に、千葉から帰った藤九郎はこう復命した。

常胤の館を訪れて案内を乞うと、暫くして客亭へ通された。常胤の座の傍には、長男の胤正と六男の胤頼が控えている。

頼朝の意を伝えると、常胤はつぶさに盛長が述べるところを聞いていたが、雄弁な彼の誘いを警戒しているのか、一言も発しないのみならず、或は全く興味が無いのか、きいているのかわからないのか、じっと両眼を閉じて眠っている風にも見える。

父の態度をもどかしく思つたのか、胤正と胤頼とは、双方から膝をすりよせて、

「父上、頼朝公、義によって兵を起され、国のため害を除かれようとして、その最初に兵を我等に召されています。何の躊躇に及びましようぞ、速かに応ぜられよ」

「早く、お受け遊ばせ」

と言葉を合せて、熱情こめて促がした。

静かに目を開いた常胤は、固く結んだ唇を開いて、

「いいや躊躇しているのではない。公が祖先の魔絶の業を興されようとするに、常胤、あえて命を奉ぜないでいられようか、八幡太郎義家公以来の之恩を考え、今源氏が又興ると思うと、感慨無量である。而も自分の生きてゐる間に、かかる時運となつたのは幸であると思うと、涙さえ出て来て物いふことさえ出来なかつたのじゃ」既に腹を決めていた常胤が、涙ぐんで語ると、胤正と胤頼は、うなづき力強く感じたのであつた。

やがて、盛長の旁を横つて、そこへ酒肴が運ばれて来た。

常胤は、こう進言した。

「何はあれ、この辺はさしたる要害の地ではありません。相模国鎌倉こそ、源家発祥の故地なれば、鎌倉へお越しあれ、常胤一門を

率いてお供のため、お迎えに参上いたしまする」

盛長のこの報告に、頼朝は、いと満足の色を現わしていた。

三

盛長との盟約によって、常胤は直ぐと兵をあつめて下総の館を進発しようとする、胤頼は父に向つて、

「当国の目代は平家の方人であるから、吾等一族悉く境を出でて源家に参するなれば、必らず留守を襲うて来るに相違ない。それ故先ずこれに兵を進めて誅すべきです」と進言した。

今輕率に動いては、目代に乗ぜられる隙をおそれたのであった。

常胤は、胤頼の提言を尤もとして、

「早く行つて追討して参れ」と命じた。

勇躍してよろこんだ胤頼は、甥の十七歳の若武者小太郎成胤をつれ、郎党を率いて機先を制して目代の館を襲った。

目代もさるもの、直ぐと数千の郎党を指揮して防ぎ戦わしめた。

攻防互に激戦を交えたが、雄雄が容易に決しない。

折柄、北風しきりに吹いていた。

初陣と勇んでいた成胤は、

「この上は、敵の館を焼き払え」

郎党に下知して、館の後方に廻つて火を放たしめた。

黒煙がもくもくと舞い上り、館から紅蓮の燄を吹き初めた。敵は

驚いて、戦うより先ず火を消さんものと、あわてふためき右往左往するばかりである。火を逃れようとした目代は捕えられ、終に胤頼に討たれてしまった。

目代の敗死をきくと、下総国千田庄領家判官代親政は、直ちに報復せんものと、軍兵を率いて常胤を襲つて来た。

親政は、刑部卿忠盛の娘婿であり、清盛の妹婿に当る。平清盛とは義兄弟の間柄であつたので、反平家の動きは黙視出来ない。

けれども、源家再興の旗印の下に馳せ参じようとする意気軒昂たる常胤の敵ではなかつた。もろくも、敵はついで逃げ去つてしまつた。常胤の孫小太郎成胤は、若年ながらよく戦つて、天晴れ親政を生虜にしてしまつた。

その年の九月十三日、頼朝は、安房にいた彼の許に集つて来た三百余騎の手兵を率いて、安房を一巡して上総へ入つた。頼みとしていた広常は、兵を集めている最中であるといつて終に顔を見せなかつたので、上総を素通りして下総に入り、下総の国府に到着した。

そこへ常胤は、子息並び嫡孫成胤、一族郎党三百騎を率いて頼朝を出迎えた。常胤は、先ず生虜にした千田判官代親政を召覧に供し次いで頼朝の兵に駄餉（弁当）を献じた。

頼朝は、たのもしげな若者と当の殊勲者成胤を見守つた。広常と違つて、三百の小勢ながら千葉一族の加担が、よほどうれしかったに相違ない。常胤を傍近く招いて、

「其の許の芳志は忘れぬぞ、今日より御身を、我が父の如く思うぞ」と手を取らんばかりに語つた。

頼朝の過分の言葉に感激した常胤は臉を熱くしていた。（未完）

新規会員

神奈川 奥平昌寿
 平野諒栄
 西念寺
 西福寺
 千葉 西福寺
 工藤淳亮
 北海道 石川大瑛
 青森 法運寺
 亀田金次郎
 万福寺
 秋田 高橋海龍
 萩生田良雄
 山形 末武清孝
 新潟 山口隆戒
 観音寺
 新善光寺
 吉田善堂
 鈴木良運
 石川 竹松本覚
 長野 竹松本覚

愛知 横山とく
 鈴木大運
 三重 浄土寺
 京都 大龍寺
 奈良 安井就道
 和歌山 谷上信賢
 島根 福本光峻
 広島 中田圭子
 徳島 山中道子
 正覚寺
 靈巖寺
 東京 源照寺
 服部覚善
 北海道 菊地正美
 浄福寺
 大阪 中村晃川
 奈良 香月乗光
 京都 上田耕作
 三重 林一平
 勝田音吉

三重 奥野庄太郎
 平本かぎ
 石川琢応
 (浄土寺様紹介)
 山田徳尚
 村瀬円修
 滋賀 慶雲寺
 和歌山 長谷川岱祐
 東京 山本康彦
 野呂瀬義道
 東覚寺
 西岸寺
 岩田浄之
 山口 森田定男
 (蓮門真道師紹介)
 右に新規御申込みの尊名
 を列記して、お礼と致しま
 す。
 今後ますます専念努力し
 本誌の真価を発揚せしめ、
 皆様の御愛顧にむくゆる存
 念でございます。

「浄土」購読規定

一部 定価 金四十円

(送料 四円)

会費一万年

金四八〇円

(送料不要)

浄土 八月号

昭和十年五月廿日
 第三種郵便物認可
 昭和三十三年七月廿五日 印刷
 昭和三十三年八月一日 発行

定価 四十円

編集人 竹中信常

発行人 佐藤密雄

印刷人 神谷秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

発行所 法然上人讃仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二二八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

解説 増谷文雄 画 井上与志夫 詩 島田きんや
 保育ののさま 定価八〇円 七色刷 美本
 (十部以上七〇円 千実費)

この本は、宗祖 法然上人のご生涯とご教旨を、少年少女にわかりやすく、親しみやすい形で描きだしたものです。
 内容は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

指導 外語 教授 増谷文雄 画 中村ひろし
 監修 東大正大講師

教育 法然さま 定価一三〇円 一〇四頁
 (十部以上一〇〇円 千実費)

うつくしい絵と、やさしい童謡とで、仏の世界のイメージをおさな心の中に、植えつけるようにつとめ、お母さま方のために、それぞれの絵に解説をつけました。

若い世代の人々のために

大正大学教授
 竹中信常著

宗教心理の研究

A 五判 五九〇頁
 定価一三〇円 千実費

宗教が現代人の心理にどのように受けとられているかということを、古来の学説史に即して説明すると共に、信仰の心理、靈感の心理、宗派心等をテーマとしてとり上げています。宗教を理解し、信仰を他に伝えんとする者にとって必読の書である。

発行所 青山書院
 東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)
 振替東京 九九三〇三番

取扱 法然上人鑽仰会
 東京都品川区上大崎一丁目七八二
 振替東京 八二一八七番

御袈裟法衣御調進

○ 錦 金 欄

○ 特種織物

○ 御 水 引

○ 御 打 敷

○ 御 幡

○ 稚児衣裳

御法要に梵鐘供養に新製の稚児貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺 芝大 宗務所 御用達
 大正大学 芝中高校 淑徳学園

東京都港区西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
 振替東京七八九四五番

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円七角八分

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円七角八分

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人讃仰会

振替 東京八二一八七番

浄土

第二十四卷

第八号

定価金四拾円(送料別)

最新刊

童話学入門

B 6 360頁 価480円 750円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山 憲 尚 著

- ◎童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- ◎内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部
取次所 日本童話協会